

公共哲学1（担当：玉手慎太郎）期末試験問題

A. 以下のそれぞれの問いについて、選択肢から最も適切なものを一つ選ぶ形で解答してください。

（1問5点）

（1） 旧ソ連の政治が、依拠していたはずのマルクスの理想（＝資本主義による人間性の否定を乗り越えること）から乖離してしまった理由は何か。

1. 生産力の拡大のため、「経済特区」という形で資本主義を部分的に残存させざるをえなかったから。
2. 資本家と労働者という階級を廃絶するために資産をすべて国有化した結果、国家官僚が労働者を支配するようになったから。
3. マルクスの理論はドイツを想定して組み立てられたもので、領土が遥かに広大なロシア地域に応用できるものではなかったから。
4. マルクスが主著『資本論』を完成させることなく没してしまったために、その理論を発展・継承させる人物が現れなかったから。

（2） ラクラウとムフが1980年代に「ヘゲモニー闘争」という概念を打ち出した理由は何か。

1. 冷戦体制の下では、アメリカとソ連という二つのヘゲモニー国家の闘争が世界政治を動かしていたから。
2. フェミニズムや環境運動といった新しい社会運動は、それまでの左派の階級闘争の概念ではうまく説明できないものだったから。
3. 当時のソ連の経済的な衰退の原因は、政治的なヘゲモニーをうまく経済発展につなげられなかったことにあったと考えたから。
4. 核戦争の危機が表面化する中で、軍事力を用いた闘争に代わる新しい国家間闘争の手段が求められていたから。

（3） ラクラウとムフの考える「アイデンティティ」の意義の説明として、適切なものはどれか。

1. アイデンティティは生まれつきのものであり、それゆえにアイデンティティに基づく連帯は強い結束を有する。
2. アイデンティティは「われわれ／彼ら」の区分線を引くものであり、そしてその区分線は基本的に国境と一致する。
3. アイデンティティは、そのアイデンティティを共有しない外部の人々の存在があってはじめて意味を持つ。
4. アイデンティティは言説を通じて表面化したり背景化したりする不確かなものであり、政治的な運動の基礎にはなり得ない。

(4) 一般的な代表制デモクラシーとラディカル・デモクラシーの対比として、適切でないものはどれか（各選択肢の説明のうち、左が代表制デモクラシー、右がラディカル・デモクラシーの特徴を述べているものとする）。

1. 人間像：自己の利益を追求する理性的な個人／アイデンティティに基づいた連帯を求める情動的な個人
2. 政治の内実：対立する利害の調停／ヘゲモニー闘争
3. 政治の手段：選挙および熟議／選挙なしの権力集中
4. 目的：最善の帰結の確定と合意／多様性の尊重と社会の変化

B. 以下のそれぞれの問いについて、選択肢から適切なものをすべて選ぶ形で解答してください。

(1問10点：完全正答のみ認めます)

(5) 1990年代に成立したリベラリズムに基づくコンセンサスをムフが批判した理由は何か。

1. 1990年代のリベラリズムはそれまでのリベラリズムと異なり、一国中心主義的で排他的なものとなってしまったから。
2. 政治的な選択肢が消失することで、政治を通じたアイデンティティの構築の機会が人々から奪われてしまったから。
3. このコンセンサスは、グローバリゼーションの進展の中で苦しい生活を強いられている人々の声に対して耳を傾けないから。
4. コンセンサスに抵抗する人々は政治の常識を理解しないものとみなされ、民主主義に対等に参加する存在として認められないから。

(6) ラクラウがポピュリズムについて論じた内容として適切なものはどれか。

1. ポピュリストは、人々の利害や意見を代表しているのではなく、人々のアイデンティティを代表している。
2. ポピュリズムは政治的な対立の区分線を引き直すことによって、それまでなかったような幅広い支持を集めることがある。
3. ポピュリズムはしばしば感情に訴えるが、それはアイデンティティの構築を助けるという点で非合理的なものではない。
4. ポピュリストが示す「われわれの要求」は、多くの支持者に受け入れられる必要があるため、具体的でシンプルなものになる。

(7) アレント、ハーバーマス、ラクラウ&ムフの思想の整理として、適切な文章はどれか。

1. 民主主義から全体主義に至る可能性について、アレントやハーバーマスが強く危険視したのに対し、ラクラウ&ムフはむしろその可能性も含めて、民主主義の可能性全体を肯定している。
2. アレントおよびラクラウ&ムフの思想では、個人が自己の在り方をどのように捉えるかという視点が重要なものとなっているのに対し、ハーバーマスの関心はあくまで民主主義の適切な制度設計にあり、個人の生活は重視されていない。
3. コミュニケーション的理性を重視するハーバーマスや、ヘゲモニー闘争をめぐる人々の連帯を重視するラクラウ&ムフの議論には、アレントが論じた個人的な「良心」の重要性を認める余地はない。
4. アレントとハーバーマスは、人々が政治に対して無関心になり大勢に流されてしまうことを懸念したが、ラクラウやムフからすれば政治参加はアイデンティティ構築の機会であり、人々が政治について無関心になったり大勢に流されたりすることはあり得ない。
5. ハーバーマスの熟議民主主義にせよラクラウ&ムフのラディカル・デモクラシーにせよ、アレントが危惧したような、「政治的な責任のゆえに個人が思考停止してしまう」という事態はなお起こりうるものであり、その点に注意する必要性はなお残っている。

以上 (50 点満点)。

#### 【正答と補足説明】

正答は順番に、2、2、3、3、2 + 3 + 4、1 + 2 + 3、1 + 5 となる。50 満点であり、同じく 50 点満点で実施した中間テストとの合計点を最終評価とした。

問いの内容は、授業の後半に扱ったエルネスト・ラクラウとシャントル・ムフの「ラディカル・デモクラシー」についての理解を問うものを 6 問、授業で扱った思想相互の関係性を問う問題を 1 問設定した（授業の前半に扱ったハンナ・アレントおよびユルゲン・ハーバーマスについての理解は中間テストで確認した）。二つのテストを合わせて、授業内容の理解度を総合的に確認することを目指した。

選択式の問題というと学生は難易度が低いものとみなしがちだが、その判断は必ずしも正しくない。この期末テストは、細かいところまで正確に理解しておくことが必要な複数選択問題を含めることで、十分に勉強していなければ容易に得点できない問題になっていると考えている。実際のところ得点分布も決して高得点帯に集中したわけではなかった。